

大使コラム（2013年4月）

4月、先月から今月にかけても、晴天の合間に突然の雨に見舞われる日が続きました。この国では、春は雨が多い季節ですが、今年は例年をはるかに超えているようです。スペイン西部に源を発し、イベリア半島をほぼ横断してリスボンに達するテージョ川も、このところ水量が増しているのは、イベリア半島全体で雨が多いためでしょう。

この気候不順にも増して、ポルトガルの政治状況は、このところ波瀾万丈な季節を迎えています。緊縮策が続く、景気の悪化や失業の増加で国民生活はますます厳しい試練を受けています。昨年のGDP成長率はマイナス3.2%、1月の失業率は17.6%、頼みの綱の貿易収支も欧州経済などの悪化で輸出増の鈍化が見られました。政府の見通しでは、明14年には景気の悪化に歯止めがかかり、翌15年にはプラス成長に転ずるとのことですが、国民の多くは緊縮策の必要性を理屈では理解しても、日々の生活に不満を募らせているのも現実です。

実際、先月初めには改めて全国規模の抗議デモがありました。また、リスボンなどの大都市では連日のように小規模なデモが見られ、公共交通機関も毎週のようにストをしています。ただし関係者によれば、地方の抗議行動では参加者がむしろ減少しているとのこと。これは、日刊紙「プブリコ」が「国を覆う絶望感」とまで表現した厳しい現状の裏返し、と見るべきなのかもしれません。

この苦境でも大きな社会的混乱は見られませんが、世論調査は野党の支持率が連立与党を大きく上回り、差が拡大していることを示しています。かかる国民の不満を背景に、社会党は先月末、ついに「内閣不信任案」を国会に上程しました。連立与党が過半数を占めていて、4月3日の採択では、否決されるのは予想されていたことです。しかし、与野党の関係が政策論争を超えて、政権の続否をかけた「政局」にまで至ったことは、政治状況の大きな転換になりました。またこれは、国の対外的な信用回復にも悪影響を与えかねず、これまでの苦しい努力に水を差す結果にもなりかねません。経済・財政の再建に向けた緊縮政策は、ここに来て大きな転機を迎えたと言えるでしょう。

4月第一週に起こった政治的激震は、これに止まりませんでした。

「不信任案」が否決された翌4日には、コエーリョ首相の右腕といわれ、学位の不正取得問題で批判を浴びながら閣内にとどまっていた有力閣僚が、突如辞任する事態が発生しました。閣僚の辞任は、この内閣で初めてです。辞任の理由について本人は明確な説明をしていますが、政局の中での判断だったと見られます。

さらに翌5日には、本年度予算の支出削減措置の一部に対し、「憲法裁判所」は違憲の判決を下しました。「予算法」の条項のうち、（1）公務員、（2）臨時雇用の教員・研究員及び（3）年金生活者それぞれの「期末手当」2ヶ月分のうち1ヶ月分

(年金は0.9ヶ月分)の減額措置は違憲、(4)雇用労働者に対する疾病休暇手当の5%減額と失業手当の6%減額も違憲、というものです。この判決により、最大約13億ユーロの財政削減が違憲にされたと見られます。

これらは、トロイカとの合意で本年の財政赤字目標(GDP比5.5%)を達成するための措置でした。加えて、政府はトロイカ合意により、4月中にも40億ユーロの「構造的財政支出削減策」を「中期予算計画」(4年間の予算方針を示す計画)に計上しなければなりません。今回の違憲判決は、これらについても政府の手を縛ることが予想され、他の削減方法が限られる中で、今後トロイカ合意を実施する上で深刻な影響を与えると見られます。現在、政府は補正予算の作業を行っていますが、臨時的措置として出張旅費や光熱費に至るまで経費の凍結を指示し、外務省も2週間はすべての海外出張を取りやめたということです。

違憲判決の内容が予想を上回ったこともあり、コエーリョ政権は辞任するのではないかと憶測もでて、週末の臨時閣議と同首相の所信表明演説が注目されました。しかし、大統領からの政治的支持を確認したうえで、首相は政権を維持する旨の発表を行いました。今後、違憲判決の制約の中で、トロイカ合意に沿った緊縮政策や構造改革などの成長戦略の続行に、政府は苦勞することでしょう。反対派の攻勢もさらに勢いを増すかもしれません。

このような政治の動きには、今後も目が離せません。

3月26日から29日まで、ポルトス外相は日本を公式訪問しました。2008年に当時の国会議長に同行して以来、2度目の訪日です。

3泊4日の限られた日程でしたが、岸田外相との会談と夕食会、茂木経産相との会談、日ポルトガル友好議員連盟との朝食会、衆議院外務委員長及び公明党代表との会談、経団連セミナーでの講演、経済界の方々との夕食会と昼食会、日ポルトガル友好協会との昼食会、マスコミのインタビュー、日本プレスクラブでの講演など、寸暇も惜しむような日程を精力的にこなし、多くの人々と対話をして頂きました。同行した農業省のヴィエラ副大臣も、農水相及び厚労省を訪問し、日本側の副大臣等と会談しました。

日程の合間にポルトス外相は同行した私に、「自分は、日本食や建築や映画、文学など、日本文化には若い頃から魅せられてきた。しかし、今回多くの日本人に接して、改めて日本人や日本の社会の立派さに感銘を受け続けた。自分は本当に日本が好きだ。」としみじみ語られました。これを聞きながら、わたしは今回の招待は成功だったと嬉しく感じました。同時に、一国の文化や社会の魅力が、外国との関係にも影響を与える現代の外交において、日本のソフトパワーの強さというものを改めて感じた次第です。

なお今回は、約20名ほどの企業関係者が同時に訪日しました。ポルトガル投資貿易振興庁(AICEP)などの手配で、多くの日本企業と接触する機会を持ち、ビジ

ネスの面でも有意義な訪問となったとお聞きしています。

訪日の結果、フォローアップすべき案件も増えたので、引き続き戦略的な視点を持ちながら、両国関係の発展に努めたいと考えています。

最後に、先日当地日本人会が行った「お花見の会」にも触れたいと思います。リスボンから北東に約350キロの山岳地帯に、フンダオン市というサクランボの産地があることは以前もご紹介しました。春のこの時期、ここの山合では至るところ桜の花が咲き乱れます。今年は是非日本人会の活動として、ここに皆でお花見に行こうということで、日本人会の実行委員会のご尽力により、バスを仕立ててお花見に行きました。桜の下での宴会は、異国に住んでいることをしばし忘れさせる、懐かしい日本の風情でした。ご挨拶に来られた市の副市長さんや観光局の方々、宴会の場所を提供して下さいました。また、後片付けまできちっと行う日本的な作法にも、とても感心していました。我々にとっては当たり前が、国際標準から見て高いレベルにあるということに改めて実感し、日本の「ソフトパワー」に誇りを感じた次第です。

当地では気候の安定しない日がしばらく続きそうです。

時節柄、皆様にはご自愛の程をお祈り申し上げます。